弘前大学教職大学院
News Letter
第 21 号 2024.1.24

教師の「ウエルビーイング」向上のために

専攻長　中　野　博　之

本学教職大学院では，外部資金を獲得して今年度より3カ年に渡って組織的に研究を行うこととなりました。この研究でのキーワードは教師の「ウエルビーイング」の向上です。「ウエルビーイング」は辞書では身体と心と社会の良好な状態とされています。

今年度は，まず教師の「ウエルビーイング」をどう捉えるかについて協議をしてきました。「それぞれの教師生活が良好かどうかはそれぞれの教師自身が定義する」という大前提のもとで，研究の対象として教師の「ウエルビーイング」を考えることは簡単ではありませんでした。そうした中，本学教職大学院の桐村准教授の意見をもとに本研究では「学校の自治」という側面から教師の「ウエルビーイング」を考えていくことにしました。つまり，学校の子どもたちの実態や課題を教師自身が捉え，子どもたちに即した教育活動を自治的に行うことができているのかどうかで教師の「ウエルビーイング」を考えていこうということです。

学校の自治を支えるためには教師自身が自律している必要があります。また，学校として自治的に教育活動を行うためには，教師は職場の同僚と合意形成をはかり組織として行動していく必要もあります。合意形成をはかるためには，同僚に自分の考えを納得してもらうための説得力を持った言葉と論理的な思考力，そして同僚の考えと気持ちを理解した上でどの点でお互いに妥協できるのかを見抜く洞察力が必要になるでしょう。また合意形成のもとで開始された新しい活動には当初予期できなかったトラブルがつきものであることを理解し，活動の発案者であろうとなかろうと組織の全員が一丸となってトラブルに対処していける協働的な姿勢も必要となるでしょう。この「組織の全員」には管理職の先生方も含まれていることは言うまでもありません。

青森県の先生方の教師としての「ウエルビーイング」向上のために本研究が寄与できるように来年度も研究に取り組んで参ります。そして本学教職大学院の院生の皆さんには，子どもたちの幸せのために粘り強く同僚と合意形成をはかり，協働的に教育活動に取り組むことができる自律した教師になるべく，これからも努力して欲しいと願うばかりです。

「教育実践研究発表会」を開催（２月13日）―対面・オンライン併用―

教職大学院では、在学院生が２年間で３回、教育実践研究発表会を行います。１年次院生の初めての年次報告会と２年次院生３回目の最終報告会を、令和６年２月13日（火）に、青森県総合学校教育センターを主会場とし、Zoom によるオンラインを併用して開催します。

ミドルリーダー養成コースの院生は、２年生になると現任校で勤務しながら実践と研究を重ね、研究課題解決に取り組みます。ストレートマスター（学部卒）の院生は、教科・領域等での指導を通して児童生徒の資質・能力を高めるための研究に取り組んでいます。

院生の研究テーマを次頁に掲載しました。多くの皆様にご参加いただき、さまざまな観点から御指導・御助言をいただければ幸いです。日程、申し込み方法等については、当大学院のホームページ（https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/gs//wp-ontent/uploads/sites/3/2023/12/r5_presentation.pdf）をご覧ください。

「２年次院生 最終報告会」研究テーマ

安保　愛子	小学校中学年におけるケア的思考の醸成を基盤とする自治能力の向上
大池　由紀子	小規模の小中一貫校における教師の協働的な授業デザイン―校種を超えた異学年交流を取り入れた授業実践を通して―
葛西　史生	生徒の自学自習を促す教師の関わりについての考察―個人内評価と自己評価のあり方に焦点を合わせて―
柏﨑　康司	よりよい学校生活に向けた行動変容―多元的な非認知能力獲得のための介入―
工藤　渉太	１人１台端末に対する教師の意識変容―教育活動全体での活用を通して―
佐藤　大記	病弱教育における児童生徒の自己肯定感を高めるための支援方法と教員の体制に関する研究
寺山　陽子	自ら学ぶ意欲を引き出す「一人ひとりに学びがある授業」づくり―少人数制で行う校内研修を通して―
雪田　聡	高校数学における学力の類型化とそれに基づく指導と評価のあり方に関する検討
鳥元　帆乃佳	子どもの権利の観点から援助要請への意欲を高める指導のあり方－中学校における保健室前廊下の掲示物を活用して－
新田　ひかり	三角ロジックを活用した国語科授業実践―根拠のある考えの形成を目指して―
藤田　晟雅	すべての児童が参加し , 学びの楽しさを実感できる算数科の授業を目指して―授業 UD の視点を中心に―
板垣　侑磨	運動嫌いを減らす授業づくり
中村　由惟	小学校外国語における児童の自由な発話を促進する Small Talk の継続的実践と総括的評価
瓜生　太知	生徒の興味・関心を向上させる理科授業－日常生活と関わる課題を用いることの効果について－
古川　冬真	中学校体育授業における運動習慣の獲得を目指した授業づくり――過性運動に伴う快感情に着目して―
佐藤　陽奈子	学習動機づけに関する英語科授業研究－持続可能な CLIL 型授業の実現に向けて－
高田　真那	授業のユニバーサルデザインを通して、「参加する」から「理解できる」小学校国語科授業づくり
土田　康裕	素朴概念を科学的概念に変容させるための授業づくり

「１年次院生 年次報告会」研究テーマ

安達　大樹	不登校の予防に向けたプロアクティブな生徒指導環境の構築―教師による協働的な『魅力ある学校づくり』を通して―
葛西　良城	高等学校国語科における自立した学習者を育てる授業実践の検討－認知・メタ認知システムの往還を通して－
舘田　智久子	主体的・対話的進路指導の実践－生徒が自ら考え決定し表現することを支援する－
舘山　収平	校内研修を手がかりとした「共創」に関する一考察－「対話」「協働」「学び合い」をキーワードに－
奈良岡　幸輔	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた教師の授業観の転換を目指して－ ICT の活用意識の変容と ICT 活用指導力の向上のための方策を通して－
原　文子	子どもたちがともに学び合う活動の充実に向けて－学び方の多様性に着目して－
増渕　健	児童の SNS にかかわるセルフコントロールの向上を目指す指導・支援－児童の SNS 依存状態への予防的教育と教育相談を通して－
村井　千絵美	生徒のつまずきに着目した中学校英語科における授業 UD の実践
藤田　桃	生徒が心身の状態と向き合うための養護実践－問診カードを用いた養護教諭の関わり－
安田　和未	小学校外国語における全員参加を目指した授業づくり－ゲーム活動を用いることの効果について－
市川　幸亮	高等学校数学科における定理を重んじる授業実践－ ICT 活用の観点から－
金谷　理利果	中学校家庭科の「金銭の管理」に関する授業実践と学校行事を架橋したカリキュラムの開発・実践－変化の激しい社会に主体的に対応するために－
瀧本　誠博	中学校社会科歴史教育における地域史を活かしたカリキュラム開発
成田　秀斗	「健康リテラシー」の向上に向けた保健の授業改善の試み－「真正の評価」に着目して－
佐藤　大智	知的障害教育におけるキャリア発達を促すための授業デザイン－「なりたい自分」への気付きを対話を通し“表現”する授業－

弘前大学教職大学院 News Letter
第21号 2024.1.24

2年次生 私の大学院生活―2年間で得たもの・学んだこと―

※ミドルリーダー養成コースの院生については所属校名を記載しています。

安保　愛子（青森市立油川小学校）

教職大学院での1年目の生活は、年齢も校種も異なる院生と過ごし語り合うことで、自分の固まっていた学校文化の考えが解け、先生方の講義を通じて新しい知識を得て、教育への思いが変わりました。現場に戻った２年目は、学んだことを生かすことで、学校課題や子ども達への向き合い方も大きく変化しました。この２年間は私にとって、多くの気付きと貴重な経験ができた充実した時間となりました。これからも、「理論と実践の往還」を忘れず、「学び続ける教員」でありたいと思います。最終報告会では、教職大学院の先生方、協力いただいた勤務校の先生方や子ども達に感謝しながら、これまでの成果を発表したいと思います。

大池由紀子（十和田市立大深内中学校）

１年目、理論を中心に学び、多くの気づきと反省がありました。「実践あって理論なし」だった、これまでの教員経験を見直す機会となりました。2年目、学校現場に戻り、学んだことを活かそうと意気込んでいましたが、思い描いていたようには実践できませんでした。目の前の生徒の実態や学校の環境などを踏まえた柔軟性と適応力が私にはまだまだ足りないのだと感じています。「理論と実践の往還と融合」が重要であることを改めて実感しました。研究や大学院での学びは２年で終わりますが、学びを活かすチャンスやお世話になった方々に還元していくのは、むしろこれからだと思っています。感謝の気持ちを忘れずに、精進し邁進していきます。

葛西　史生（青森県立弘前高等学校）

昨年度は、校種・年代を超えて様々なテーマで話し合いを行い、学んだ理論を深めることが出来ました。今年度は、その理論を踏まえて日々の教育活動を実践することで、理論と実践の往還を行うことが出来たと思います。最終報告会では、「生徒の自学自習を促す教師の関わり方についての考察－個人内評価を自己評価のあり方に焦点を合わせて－」というテーマで発表いたします。２年間の学びと研究の成果を発表し、今後の教育活動に生かして行きたいと思います。

柏﨑　康司（八戸市立湊中学校）

研究を重ねるうちに気づいたことがあります。自己の研究テーマ「よりよい学校生活に向けた行動変容－多元的な非認知能力獲得のための介入－」は、よりよい教員になるための私自身に対するアプローチだったのではないだろうかと感じています。そして、今年度さまざまな活動の中で頂戴した「教員の学びと生徒の学びは相似形である。」という貴重なフレーズを心に刻み「学校の主役は子どもたち」という考えのもと、今後も何事に対しても「問い」をもち、学び続ける教員として日々邁進したいと考えています。最後になりますが、実践研究に御協力くださった所属校の先生方、生徒の皆さん、御指導くださった教職大学院の先生方に対し、心から感謝申し上げます。

工藤　渉太（つがる市立木造中学校）

教職大学院での2年間は大変貴重な学びの時間となりました。学校が抱える課題に同僚や仲間とチームで解決に向かうために、自分が果たすことができる役割について考えることができました。特に、学校に関わる様々な方々との繋がりを活かそうとする視点をもつことができるようになったことは自身の成長できた部分であると感じます。学んだことを現場に還元できるよう、広い視野をもって子どもたちに向き合っていきたいと思います。これまで実践研究に協力して下さった木造中学校教職員の皆さん、指導いただいた教職大学院の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

佐藤　大記（青森県立青森若葉養護学校）

教職大学院での学びの中で、さまざまな人との出会い、つながり、協働がありました。そこで私は学び続けることの大切さを認識しました。時代に合わせて子どもたちは変わっていきます。そうであれば教師も変わらなければなりません。変わるためには学ばなければなりません。教職大学院での学びが修了しても、学び続ける姿勢を維持し、自己研鑽を重ねていきたいと思います。２年間の貴重な学びの場を与えてくださった勤務校の先生方、御指導いただきました教職大学院の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

寺山　陽子（弘前市立新和中学校）

教職大学院での学びは、自分の考え方の癖を見直す機会を与えてくれました。また、自分の思いを伝える際、言葉選びがとても大切だということに気付かせてくれました。さらに様々な経験や素敵な方々との出会いはとても刺激があり、私の財産となっています。２年前に思い切って教職大学院に挑戦したことで、新しい扉を開くことができました。実践研究に協力してくださった勤務校の先生方、指導してくださった教職大学院の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

雪田　聡（青森県立田名部高等学校）

早いもので、教職大学院での学びが終わろうとしています。初めは現場を離れることに戸惑いや不安もありましたが、院生や先生方のおかげで充実した日々を送ることができました。学んだことは色々ありますが、１つあげるとすれば「考える」ことです。知識を覚えるだけでなく、意味を考え活用しようとすることで理解が深まったと思います。改めて生徒の学びを見ると、色々な学び方をしていることに気づきました。生徒の質問や考え方にはっとさせられることもありました。教師が生徒に知識や考え方を伝達するだけではなく、生徒と教師が一緒に考え、生徒をよく見て援助することを大切にしていきたいと考えています。

鳥元　帆乃佳（学校教育実践コース）

大学院で過ごした2年間では、養護教諭の考えだけではなく、学級担任の先生方の考えや社会の中で子どもたちを取り巻く問題など、多様な視点で教育について学ぶことができました。教育実習や大学での講義、実践研究というさまざまな活動を行き来する中で、自分は養護教諭として何がしたいのかという自分の教育観を問い直す日々でしたが、その経験が今後、働く中での自信につながっていくのではないかと感じています。この2年間の学びを忘れず、これからの養護教諭としての働きに活かしていきたいと思います。

新田　ひかり（学校教育実践コース）

２年間の大学院生活を通して、教員としての理念が確かなものになりました。この背景には授業を通して幅広い知識・技能を習得し学校教育を俯瞰する眼を養えたこと、長期にわたる実習を通して生徒と深く関わったことで、自身の望む教育が見つかったこと、そしてこれらの知識や経験の積み重ねが教員としての自覚と自信につながったことが挙げられます。大学院で学んだことを糧に、私は「生徒が夢を抱くことができる教育」に尽力していく所存です。２年間本当にありがとうございました。

藤田　晟雅（学校教育実践コース）

私は、教職大学院で学ぶことができて本当に良かったと思っています。講義だけではなく、フィールド実習や、幼・小・中・高・特への観察実習、講義でのフィールドワークなど、私の足りなかった知識と経験をこの２年間で得ることができました。自分の研究テーマに沿って授業実践を2年間行ったフィールド実習でしたが、最終日に子どもたちが作った手紙をくれたり、泣いて別れを惜しんだりしてくれた時に、失敗しながらも諦めずに頑張って良かったと心から思えた瞬間でした。

４月から現場に出ますが、子どもたちの成長を見て、頑張ってよかったと心から感じることができるように努めていきたいと思います。

板垣　侑磨（教科領域実践コース）

これまで、どんなアプローチをすれば、運動に対してネガティブな感情ではなく、ポジティブな感情を持つことができるのかということを軸として研究してきました。体育の授業は子どもたちが平等に運動に親しむことのできる時間でもありますが、それと同時に運動が嫌いになる瞬間にもなり得るという面も持ち合わせています。いかに後者の場面を減らし、運動することへの喜びや楽しさを感じさせることができるのかを追い求めて研究してきました。この2年間の研究と学びの成果を惜しみなく発揮し、これまで支えてくださったすべての方々への恩返しとなるような報告会にします。

中村　由惟（教科領域実践コース）

「児童に外国語で多様な人とコミュニケーションを図る楽しさを実感させたい」という一心で、2年間研究をしてきました。今年度は、Small Talk を毎時間実践し、その効果を２単元ごとの総括的評価により検証しました。児童の一生懸命英語で伝え合おうとしている様子や、どんどん上達していく姿に感動する日々でした。今年度は学会発表にも挑戦する機会をいただき、より深く研究を進めることができました。２年間、いつでもあたたかくご指導・ご助言をしてくださった実習校と大学院の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。最終報告会では、今後の実践と研究に繋がる発表となるように頑張ります。

瓜生　太知（教科領域実践コース）

私はこの教職大学院で過ごした2年間を通じて多くのことを経験し、教師としての力量を深めることができたように感じています。学部時代に課題と感じていた生徒との関わり方や授業の中での興味の引き出し方など、フィールド実習での実践と講義での理論を往還させながら取り組んでいくことで、自分なりの方法を見つけることができたように思います。４月からはまた新しい出会いが待っていると思いますが、この教職大学院で過ごした２年間の経験を活かしてより良い教育ができるように尽力していきたいと考えています。まずは、最後の報告会に向けて自分のやってきたことの成果を一つの形にできるよう取り組んでいきたいと思います。

古川　冬真（教科領域実践コース）

僕にとって教職大学院での２年間は人に恵まれた日々でした。大学院の先生方や先輩、同期、後輩との出会いはもちろんですが、一番僕に大きな影響を与えてくれたのは実習校での出会いです。たくさんのことをご指導いただき支えてくださった教職員の皆さん、先生としての楽しいこと辛いことなどたくさん経験させてくれた生徒の皆さん、僕にとって実習校での出会いが心の支えになっています。教職大学院に進学しなければこの出会いはなかったので、大学４年生のときに進学することを決断して本当によかったと思います。この２年間で得たことを活かして、来年度から教員として活躍していきたいと思います。２年間ありがとうございました。

佐藤　陽奈子（教科領域実践コース）

教職大学院での２年間は大切な出会いの連続であり、今後の教員生活への道標となりました。教育実習や幅広い分野の講義、日々の研究活動を通じて、自己の課題を明らかにするとともに、それらを解決するには何が必要であるか、本質的に考える力が身に付きました。どの場面を振り返っても、支えとなってくださる仲間や先生方、そして気持ちを奮い立たせてくれる子どもたちの姿があります。皆様に心から感謝しています。最終報告会では、２年間の学びの集大成として研究の成果を発表いたします。さらに、今後も学びの歩みを止めることなく、これから出会う子どもたちと真摯に向き合っていきたいと思います。

高田　真那（教科領域実践コース）

入学当初は教員として働くことに自信が持てず、不安を感じていました。教職大学院の２年間で講義、演習、実習など様々な経験をさせていただき、幅広い視点や知見を得ることができました。自分の中での考え方が変わり、常に子どもの視点で考えることができるようになったのは大きな成長であると感じています。残り少ない日々を大切に過ごしながら、これまでお世話になった皆様に感謝の気持ちを込めて、最終報告会では２年間で得た学びをお伝えできればと思います。

土田　康裕（教科領域実践コース）

教職大学院での２年間を通して、私は教師としての専門性を高めることができたと感じています。もともとは授業実践経験の少なさや、ほかの校種について知らないことが多いことに対する不安から進学しましたが、実習や他校種の先生方との関わりの中で、それぞれの専門性の違いについて知ることができました。また、実習や研究を通して、生徒との信頼関係の重要性について改めて実感しました。最終報告会ではこれまでの研究の成果を伝え、今後につなげることが出来る発表になるよう頑張ります。最後に、ご指導くださった教職大学院ならびに実習校の先生方、まことにありがとうございました。

１年次生　私の大学院生活―これまでの学びとこれからの実践―

安達　大樹（青森市立甲田中学校）

私は不登校予防に向けた協働的生徒指導環境構築を目指し、実践研究に取り組んでいます。先行研究や関連文献、そして、不登校に関わる実態調査について読み進めていく中で、不登校児童生徒に対するリアクティブな生徒指導と同等に、不登校をこれ以上生み出さないプロアクティブな生徒指導が重要であると改めて実感しました。これからの勤務校実習においては質的調査による生徒の実態を深く把握、校内研修による日常の教育活動の見直し等を行うことで、不登校予防の先にある子どもたちにとって魅力のある学校を目指して実践に取り組んでいきます。

葛西　良城（青森県立弘前高等学校）

入学以来、先生方や他の院生の方々との貴重な経験を通して、これまでの教員生活を根本から問い直す日々を送っております。新たな知見を得ることを通して、自分の中の先入観を取り去り、堅実でありながらも自由に発想する力を得ることができていると感じています。特にカリキュラム全体を俯瞰して考える視点を得たことは、これまで五里霧中であり、どちらに進むべきかもわからなかった自分に、努力の方向性を与えてくれたように感じています。次年度は、ここまで学んだ理論を具体的活動に落とし込み、一つの論題を提示できるような実践を行いたいと考えています。

舘田智久子（青森県立五所川原農林高等学校）

教職大学院に入学し、本当に良かったと実感しています。先生方のご指導の下、理論のインプットと実践のアウトプットといった学修を通して自己の教職実践をじっくり省察することができたことや、ミドルとストマスで協働する演習、実習も充実していたことで、教職という仕事をあらゆる視点から捉え直すことが出来たと思います。今後は「主体的・対話的な進路指導」について実践研究を進めていくことになりますが、「学び続ける教師」として意欲をもって、関わって下さった方々への感謝の気持ちを胸に、研鑽を積んでいきたいと思います。

舘山　収平（平川市立尾上中学校）

「光陰矢のごとし」とはよく言ったもので、あっと言う間に１年が過ぎようとしています。学校という場を少しだけ離れ、大切なことに気付くことができました。学校が、自分にとって意味のある場であったこと。周りの先生方や子どもたちがいたから、今の自分があること。当たり前でありながら、今まで深く自覚していなかったことでした。

この１年間、幾度も考えました。これまで自分は、学校や子どもたちのために何ができていたのか。これから自分に何ができるか。そして、できることなら、先生方や子どもたちとともにこれからの学校を創っていく、そのお手伝いがしたい。自身の研究には、そんな思いを込めています。

終わりと始まりが一度に近付いてきました。感謝と一抹の寂しさ、そこから生まれる新たな希望のようなものが、今、胸に去来しています。

奈良岡　幸輔（六ケ所村立尾駮小学校）

教職大学院での生活は、素晴らしい教職大学院の先生方や院生の仲間の支えもあり、様々なことを学ぶことができることに感謝しながら、充実した日々を過ごしています。Society5.0の到来により社会全体のデジタル化が推進され、教育現場においても1人1台端末によって急速にICTの活用が進んでいることを感じています。令和の日本型学校教育を構築し、全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて、更なるICTの活用の推進のための様々な方策を実行に移していきたいと考えています。そして、教職大学院で学んだことを勤務校の先生方や子供たちに少しでも還元していけるよう、これからも研鑽に努めていきたいと思います。

原　文子（青森県立森田養護学校）

実習や授業を通して多くの教育現場を見学しました。関係した皆様には、貴重な研修の機会をいただき心より感謝申し上げます。改めて特別支援教育や専門性向上のニーズを強く感じています。特別支援学校での充実を図るだけでなく、幼保小中高・関係機関・地域とつながり、多方面との相互理解を深めていくことが喫緊に求められていることを様々な声を聞いて再確認しました。私はこれまでの経験や大学院での学びをふまえて「多様な実態の子どもたちがともに学び合う活動の充実に向けて」実践研究に取り組みたいと考えています。現在は先行研究や県内外の実践例を学び、収集した事柄を周囲に前向きに捉えてもらえるような情報発信方法を探っています。

増渕　健（五戸町立五戸小学校）

「最近どう？」が私の最近の口癖です。応えは千差万別、多様な反応が返ってきます。

さて、ミドル院生は前期の履修科目が共通で、まるで運命共同体のような日々でした。後期は実践研究テーマに基づいた科目履修や実習参加により、それぞれの活動が増えたようです。

しかし、培った学びを基に語り合うことは刺激でもあり内省にもつながっています。協働の学びを通じて多様性を醸し出しているように感じます。

また、対話を通じて目的や価値の言語化・意識化・明確化が行われることで実践研究における視座が高まり広がっていると感じています。それと同時に、皆が顔を合わせる中で、日常の会話や些細な談話が潤いをもたらしてくれています。

村井千絵美（五所川原市立五所川原第二中学校）

自身の実践研究を行うにあたって、英語の学習に苦手さを感じる生徒に対して自分に何ができるのだろうかと考えてきました。生徒の学習への主体性を引き出すためには、生徒の情意面への持続的なアプローチと英語のつまずきを回避する手立てが必要であり、来年度が挑戦の一年目だと考えています。また、これまでの実践を振り返ることで、自分にはこれまで、なぜ？何のために？と立ち止まり熟考する時間が少なかったと実感しています。今年度ご指導くださった大学院の先生方、インタビュー調査やデータ収集に協力してくださった勤務校の先生方、教職大学院を通して関わったすべての方々に感謝し、研究を深めていきたいと思います。

藤田　桃（学校教育実践コース）

この1年間では、教育についての知識を学ぶことができただけでなく、養護教諭という職について俯瞰的に考え、自身の「養護」についての考え方を深めることができました。例えば、院生と意見を交換する中で、養護教諭として何が求められているのかを考えることができました。実習では、保健室という場所での養護教諭との関わりが、生徒にとっての居場所となるだけでなく、時には、成長のためのステップになることができると感じました。

今後の研究では、保健室に来室した生徒に対する問診カードを活用した実践を行います。これまでの学びを生かし、生徒の成長を支えていくことができるように取り組んでいきます。

弘前大学教職大学院 News Letter
第21号 2024.1.24

安田和未（学校教育実践コース）

教職大学院での長かったようであっという間だった濃密な１年が終わりに近づいています。授業で理論的な部分を学びながら、実習では目の前にいる子どもに授業での学びをどのように生かしていくかを常に考え続けた１年でした。ただ授業力を身に付けただけではなく、社会の問題から教育について考えたりインクルーシブ教育について理解を深めたりなど様々な視点から教育を問いなおすことによって考える力も身に付いたように感じます。今年度の研究は、授業ＵＤや授業への参加とは何かについて概念を理解するのに注力しました。来年度はこの土台を生かしながら、研究の方向性を定め、実践に生かしていきたいと思います。

市川　幸亮（教科領域実践コース）

私は教職大学院に入学してからICT教育に関して興味を持ち、高等学校数学科の授業におけるICT教育の効果的な作用について日々研究しております。この研究を進めていくためにも、今年度は実習において生徒理解に努めたり、先行研究から様々なICT教育の手法を吸収したりしてきました。まだまだ私の研究は至らない点が多くありますが、年次報告では様々な意見を頂いたうえで、これまでの実習や大学院での学習を土台に次年度の研究に生かしていければと考えています。

金谷理利果（教科領域実践コース）

私の研究は、中学校家庭科の「金銭の管理」に関する授業実践と学校行事を架橋したカリキュラムの開発・実践をすることです。この研究のために、私は生徒の実態理解に努めました。また生徒にとって、どんな手立てや教材が効果的に働くのかを考えながら授業づくりを進めました。この一年を通して授業の実践力が向上していると感じています。年次報告会では、これまでの研究成果を伝え、多くの方の意見を吸収し研究に活かしていきたいと思います。

瀧本　誠博（教科領域実践コース）

4月に教職大学院に入学して、最も印象に残っていることは、教育実習での実践の幅が広がったことです。講義で学んだ理論が実践に繋がり、学部時代の教育実習よりもさらに充実したものとなりました。授業実践のみならず、部活動や通級指導の見学など、様々な貴重な経験もさせていただきました。今後は、自分の研究を深めつつ、理論を学び、生徒が「わかる・できる」と感じ、社会科をさらに好きになってもらえるような実践をしていきたいと思います。

成田　秀斗（教科領域実践コース）

教職大学院の学びは実習や講義一つ一つが私の教員としてのスキルアップにつながるものであり非常に充実していたと感じています。思えば教職大学院に入ったきっかけは、大学卒業時点での知識量で本当に教員としてやっていけるのかという不安を感じたことでした。しかし、約１年の学びを経た今は、その不安もかなり薄れ、自信を持って教壇に立てるようになってきたと思います。まだあと１年間学べる時間があります。次には、その時間を学んだことのアウトプットや研究に費やして自分の力を確かなものにしていきたいと思っています。

佐藤　大智（特別支援教育実践コース）

大学院生活の中で、さまざまなことを感じたり考えたりしてきました。特別支援学校に対して「普通の学校と違って大変そう」と言われたり、教育活動を「障害児のお世話」的に表現されたりする等、悪気はなくても適切とは言い難い発言を耳にすることもあります。

特別支援学校は、学校教育法が規定する正規の学校であり、生徒にとっても大切な豊かな学びの場です。私はこのことを通年の実習をとおしてさらに実感し、特別支援教育について正しく理解してもらえるよう、発信していくことが大事だと考えるようになりました。まずは私自身が生徒たちから真摯に学び、特別支援教育について伝える力を磨いていきたいと感じています。そして協議の場でも積極的に発言できるよう努めて参ります。

〈編集・発行〉
弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
（教職大学院）
〒036-8560 青森県弘前市文京町１番地
Tel 0172-36-2111(代表)
メールアドレス　k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp